日本医史学雑誌　第66巻第3号（2020）　300–304

「時に癒し，しばしば和らめ，常に慰む」～guérir quelquefois, soulager souvent, consoler toujours～～to cure sometimes, to relieve often, to comfort always～この格言の由来について

森岡　恭彦

東京大学名誉教授／日本赤十字社医療センター名誉院長

はじめに

医療の本質はサイエンス（science）とアート（art）で，それには人道（humanity）や倫理（ethics）が重要であることは古くから言われてきた．そこで医師は病める人に対して「guérir quelquefois, soulager souvent, consoler toujours ～時に癒し，しばしば和らめ，常に慰む」という心がけが必要であるということが言われ，この言葉は特に医療における人道とか慈愛の心を強調する人や心身医学，終末期患者のケアに関心を持つ人たちに引用されている[1–6]．ところでこの言葉の由来については不明であるのにわが国では16世紀に活躍したフランスの床屋外科医のパレ（Paré Ambroise: 1510？～90年）の言葉とする人が多いようで，2008年の医師国家試験にこの言葉はパレの遺した名言として出題された．著者は2年前の本学会の例会でたまたまこのことを知ったが[7]，調べてみるとわが国では数人以上の先生がこの言葉をパレの言葉として紹介されており，本稿ではこの格言，名言の出典について論じ，また我が国で間違ってパレ説が広まった状況について述べ注意を喚起しておきたい．

1．結核患者のためにサナトリウムを建設したアメリカの医師・トルードー（Trudeau E.L.: 1848～1915年）が愛したこの格言

トルードーはアメリカの医師で19～20世紀に活躍し，ニューヨーク市郊外のアディロンダックス（Adirondacks）にあるサラナック（Saranac）湖畔に結核患者の療養所・サナトリウムを建てたことで知られ，今でも彼の銅像，墓や肖像画がそこにあって，そこに生前彼が好んでいた格言「guérir quelquefois,soulager souvent,consoler toujours ～時に癒し，しばしば和らめ，常に慰む」が書かれており，またその英訳はアメリカではメイヨークリニックの博物館のステンドグラスなどにも書かれていて，この格言は知られているという[8]．

このように，この名言はアメリカの医師・トルードーとの関係が深く，先ず彼の経歴とこの格言についての関与に関して触れることにする．トルードーは1848年に二ューヨークで生まれた．母親はフランス人で生後間もなく両親が別居し後に離婚することになるが，彼は母親に連れられ15年間パリに住み教育を受けた．後に父親のいるニューヨークに戻り海軍を志願していたが，兄が肺結核に罹患しその看病に尽くした．兄の死後，医師を目指し1871年に医科大学を卒業した．しかしその頃には彼も重症な肺結核に罹っていて，医師や友人の勧めでニューヨーク郊外にあるサラナック湖畔の狩猟小屋で静養することになった．当時では結核の原因は不明で有効な治療法もなく一部の医師が新鮮な空気と太陽の下での療養を説いていただけであった．彼は狩猟などに興ずる内に奇跡的に健康を回復し，自分の体験を基に1884年，この地に結核患者の療養施設・サナトリ

ウムを建設した．また1882年にドイツのコッホ（Koch）が結核菌を発見したことに刺激され，自分でも結核菌の培養を試みるなどして研究にも興味を持ち結核の研究所を併設した．結核の治療は第二次世界大戦後，抗菌薬のストレプトマイシンが登場するまで有効な治療法がなく，大気安静療法が唯一の救いで世界各国で数多くの療養所・サナトリウムが建設され，わが国でも多くの療養所が建設された．彼はこの施設の運営に尽くし，また多くの患者に対して誠意と深い愛情を持って診療したことで多くの人に尊敬されている．彼はフランス語の「guérir quelquefos, soulager souvent, consoler toujours」という格言を愛し，上述のように彼の記念像などにこの格言が残されてぃる．しかしその出典は彼によるとあるフランスの偉大な医師（physician ～内科医）の言葉としているがその医師の名前や出典については語っていない[9,10]．

わが国ではトルードーのことは早くから結核に関与した人たちによって知られ，1924年（大正13年）に茂野吉之助が紹介し，1932年（昭和7年）には関係者が集まりトルードー祭が開かれ，これは以後毎年開催され戦後まで続いた．茂野は細田藤彌と共に米国との戦争中の1943年（昭和18年），トルードーの自叙伝を邦訳し「療魂記」として出版し，その著の後記に彼の記念像に「時に癒し，屡々救い，常に慰む」と言う言葉が見られることを述べている[11]．わが国ではその後もトルードーについてはその事績がこの格言と共に語られている[12]．また少し後のことになるが，当時の東京国立結核療養所長であった砂原茂一先生はサラナック湖畔の現地を訪れ，トルードーの業績とこのフランス語の格言を「時に癒し，しばしば支え，常に慰む」と訳し，1983年に自著「医師と患者と病院」という書の終章で紹介された[13]．さらに2000年にこの地を訪問された武市匡豊もこの言葉が彼の記念像，墓，自画像に見られることを写真とともに紹介している[14]．このようにわが国ではこの格言はトルードーと共に紹介されてきたといえよう．

2. トルソーの言葉か？

この格言の作者，原典についてはこれまで，ギリシャの医神・アスクレピオスやヒポクラテス，またイギリスのナイチンゲール，フランスのトルソー，パレなどが挙げられ特にフランスの19世紀の内科医・トルソー（Trousseau A.: 1801～67年）と16世紀の外科医・パレの名がしばしば見られるようで，特にこの二人について述べておく．

上述のように，トルードーはこの格言はフランスの great physician・偉大な内科医の言葉と言っており，そうなると，トルソーではないかと言うことになるようである[8]．彼は19世紀，パリのHôtel Dieu で活躍した内科医で，低カルシウム血症患者の前腕を阻血すると局部の痙攣が起こるというトルソー徴候などでその名が知られている．また彼は医学一般についての著述もあって，この格言の作者に相応しいということだが，この言葉の原典について述べたペイン（Payne）によると，図書館員に調査させたがこの言葉は彼の著書には見つからず「. . . une infirmité sans gravité qu’on ne peut espérer guérir, mais qu’on peut toujours soulager ～治る見込みがないが，常に慰めることが出来る重症でない障碍者（患者）」という言葉があるのみであるという[8]．またオランダのド・グルーフ（De Groof）もトルソーについてその伝記を見たが，この言葉は見つからず，また彼の墓に刻まれているという話を聞き，人に頼んで，パリにある彼の墓石を調査してもらったが，そこにも発見できなかったことを述べている[15]．結局，源泉はトルソーの言葉とする根拠はないということである．

3. パレの言葉には見られない．

パレは16世紀にフランスで活躍した床屋外科医で，多くの新しい外科手技を開発し近代外科の父とされ，また4代のフランスの国王に務めたことでも知られ，その著には数多くの名言がみられこの格言の著者として相応しい人物で，西欧ではこの言葉をパレのものとする人が多いようである．パレは特に敬虔なキリスト教徒であって「je le pansai, et Dieu le guérit（現代語に修正）～私が

処置し 神がこれを治し給うた」という言葉や多くの名言を残しており，主要な著書［Les Oeuvre ～全集］の「Canons et Règles Chirurgiques ～外科の規範と規則」という章には40項目の名言が記されている．その中に「L'office du bon médecin est de guérir la maladie. Que s'il ne vient à cette fin, au moins faut – il qu'il la pallie ～良医の任務は病気を治すことである．治すことが出来ない時には，少なくとも病気を緩和させなければならない.」また「Quoi que la maladie aye pris un long trajet, du malade ne sois éloigné ni distrait（現代語に修正）～病気が長引いても患者を遠のけ見捨てるべきでない.」という記述が見られる[16,17]．これらの言葉は今問題にしている「guérir quelquefois, soulager souvent, consoler toujours」という言葉の基盤になっているとする人もいるがこの言葉がパレの言葉とは言えない．

また上述のド・グルーフもパレ説が多いことで，オランダ語訳のパレの全集を読んだが，この言葉は見られず，人を介してパレの研究者として知られるフランスのデュメートル（Dumaître P.）に問い合わせたところ，彼女の返事として「何十年もパレの研究をしてきたが，この言葉は見たことがない」という返事であったという．デュメートルに限らず，パレについてはこれまでも多くの研究者がいて，その事績は研究尽くされている感があり，この言葉がパレの著述に見られないとことは確かであると言う他ない．

4. この言葉の原典，源泉についての2つ論文

すでに述べたように，この言葉の原典，由来については諸説あるがいづれも根拠のない俗説で，もちろんアメリカのトルードーやフランスのトルソー，パレの言葉ではない．それでは誰の言葉かということになる．この言葉の原典，源泉につて述べた二つの論文があり，すでにその内容の一部については説明してきたが，参考になるので改めてその内容の要点を説明しておく．

1967年，ペイン（Payne）はイギリスのBritish Medical Jounalに医の歴史としてこの言葉の仏文を題とし，その原典について論じている[8]．彼はこの言葉の原典としてこれまでヒポクラテス，ナイチンゲール，パレ，トルードーなどが挙げられており，また近年，アメリカのホルムズ（Holmes O.W.: 1809～94年）という説もあるとしている．ホルムズは19世紀のアメリカの医師，教育者，作家で，こういった格言に相応しい人物であり，アメリカ・シカゴの神経・精神科医師，マッサーマン（Masserman）が1955年に発行した著書に「It is the physician's privilege to cure seldom, to relieve often, to comfort always. ～ Oliver Wendell Holmes, M.D.」という記述があり[18]，その後，この名言をホルムズの言葉として述べている人もあって後述のように日野原先生もこれを追認されたこともあった．しかし，ホルムズはただこの言葉を引用，利用しただけで彼が最初に作った言葉としての根拠はない．またもしホルムズが作者であるとすれば前述のトルードーはこれを仏訳して勝手に使ったことになるが，この言葉の元はフランス語というのが通説でホルムズ原典説は無理である．

ペインはこの言葉の原典として上記の人たちについてはいずれも根拠が乏しいとしており中でもフランスのトルソーとパレについては，これに近い考えの言葉があることを紹介しており，これについてはすでに述べた．

また彼はこの言葉の原典についての最も古い記述は1909年のウイットコッスキー（Witkowski）らの格言集に記述されているものとしている[19]．ウイットコッスキーらはこの言葉は15世紀にすでに一般に言われていた言葉としているが，ペインは彼らの記述より前の記述が見つかればもう少し事情がわかるかもしれないとしている．その後に出版された2冊の英語の金言・格言集ではこの格言は著者不明，15世紀あるいは16世紀にすでに言われていた言葉としており，上記のウイットコッスキーらの記述に準じているが[20,21]，そもそもウイットコッスキーらの記述の根拠は不明で，問題もある．

結局，ペインはこの言葉はパレの言葉などが時代と共に変遷し成立したものであろうとしている．

また，2002年，オランダのド・グルーフ（De Groof）は「"La médecine, c'est guérir parfois, soulager

souvent, consoler toujours”という金言の源泉についての考察」という論文を発表している[15]．オランダのハーレム（Haarlem）に俗称 Elisabeth Gasthuis という病院があり，そこの講堂の壁に上述の金言が書かれていて，ド・グルーフはその素晴らしい言葉を事あるごとに医師たちに話していたという．この建物は1971年に壊されこの言葉も喪失したが，彼はこの金言の源泉に興味を持ち調査した．先ずこれはギリシャの医神・アスクレピオスの言葉という人がいて，関連書を調べたがこの言葉は見つからず，さらにフランスのトルソーとパレについても調査したがこの言葉は見つからなかったという．このことはすでに述べた．結局，彼もこの金言の原典はすでに失われたとしている．

5. 我が国にこの言葉を紹介した人たち

(1) トルードー由来の言葉

この言葉・格言をわが国に紹介されている人についてその全貌を知ることは容易でないが，今般の調査で約10人おられることが分かった．その中の半数の人は上述したアメリカのトルードーの記念像などからの紹介で，中でも前述したが現地を訪問した砂原茂一先生は現地の研究所の所長の話として，専門家に調査してもらったがこの言葉の原典は不明であるという説明を受けたことを述べている[13]．また武市匡豊もトルードーの孫夫人はこの言葉はフランスの中部の地方の病院にあるらしいが不明と言われたという[14]．結局はトルードーの関係からは原典を知ることはできない．

(2) 日野原重明先生とパレ説

ところで，1980年，聖路加国際病院の日野原重明先生は「プライマリ・ケアと心身医学」という題の論文に「to cure sometimes, to relieve often, to comfort always, to prevent hopefully」という英語の言葉を紹介され，17世紀（16世紀の誤り）のフランスの外科医・パレの言葉とされた[22]．先生がどこでこの言葉を知り何故パレの言葉とされたかについては不明である．その後，先生はこの言葉はアメリカのホルムズの言葉とされ[23]，さらに1983年には十数年前の1967年に書かれた前述のイギリスのペイン（Payne）の論文を見つけられ，これを紹介され，この格言は出所不明というペインの見解が妥当であるとされている．しかし，なおパレ説もあるとしてパレ説に対する執着も述べておられ[24]，さらに晩年，2011年の講演では前に戻ってこの言葉をパレの言葉として示されていて不可解なところがあるが[25]，パレ説については先生の影響の大きさが感じられる．

(3) パレの名言として出題された医師国家試験とその後

平成20年（2008年）の医師国家試験に「治すこと　時々，和らげること　しばしば，慰めること　いつも」との名言を遺した近代外科学の父と呼ばれているのは誰か．という設問が出題された．解答肢に5人の名前があるが，その中，外科医はパレだけで正解はパレで疑問の余地はない（表1）．しかし，これまで述べてきたようにこの名言は原典不明でパレの言葉でない．試験後の再検討で不適切問題として採点から除外されたというがこの問題が採点から除外されたことを知る人も少なく，さらに何故不採用になったのかという理由は開示されていない．また，不採用になったこの問題についての全国医学部長病院長会議の各大学に対する調査では，その評価として，良問：2校，普通：3校，不適切：2校で不適切の理由は難問とされ，設問の誤りについての指摘は見られない．そこで国家試験問題を見た人はこの名言はパレの言葉と信用し，この間違いが広まる恐れもある．今般，筆者の調査では，国家試験後，この言葉を紹介されている人は日野原重明先生を含めて少なくとも4人おられることが分かったが全ての人がこれをパレの言葉として述べられていて[26–28]，特

表1　2008年　医師国家試験　102F15

15 「治すこと　時々，和らげること　しばしば，慰めること　いつも」との名言を遺した近代外科学の父と呼ばれているのは誰か．

a　Hippocrates（ヒポクラテス）
b　Robert Koch（ロベルト・コッホ）
c　Ambroise Paré（アンブロワズ・パレ）
d　Claude Bernard（クロード・ベルナール）
e　Edward Jenner（エドワード・ジェンナー）

に国家試験の訳文と同様な文でこれをパレの言葉として紹介されている人もおられる[26]．しかしすべての人がどこからこの言葉を知ったのか，その出所について記述しておらず，なぜこの間違いが広がったのか断定できないが，医の権威者の紹介に医師国家試験出題が重なって今後もパレ説が横行することが危惧される．

おわりに

「guérir quelquefois, soulager souvent, consoler toujours～時に癒し，しばしば和らめ，常に慰む」と言う言葉，格言は国内外を問わず医療における人間性を強調する人や終末期患者のケアに関与する人たちに愛用されている．その原典，出所については数多くの説があるがいずれも根拠がなく原典不明であるというしかない．ところがわが国では16世紀のフランスの外科医・パレの言葉とする人が多く2008年の医師国家試験にもパレの名言とする問題が出題され以後もパレの言葉として紹介される人が多く注意を喚起しておきたい．

本論文にCOIはありません．本論文の要旨は2019年11月の日本医史学会例会で報告した．また稿を終えるのに当たり，資料の検索に多大のご尽力をいただいた日本医師会医学図書館の職員の皆様，また本文作成にあたりご教示くださった吉田パスカル先生，査読者の先生方に深甚の感謝の意を表します．

参考文献

1）Da Sylva NP. To cure sometimes, to relieve often, to comfort always. Can Med Assoc J. 1985; 132: 607
2）Horrobin DF. The philosophical basis of peer review and the suppression of innovation. JAMA. 1990; 263: 1438–1441
3）Gordon J. Medical humanities: to cure sometimes, to relieve often, to comfort always. Med J Aust. 2005; 182: 5–8
4）Coote B. Medical humanities: to cure sometimes, to relieve often, to comfort always. Med J Aust. 2005; 182: 430–432
5）Kumar A. To Cure Sometimes, to Relieve Often, to Comfort Always. JAMA internal Medicine. 2016; 176: 731–732
6）瀬戸山元一．21世紀の外科学会への提言．5．人間としての個別性に対応する外科医療．日外会誌 2001；102: 270–273
7）西巻明彦．大学教育における医史学教育の問題点の考察．日本医史学会，5月例会，2018年5月
8）Payne LM.“Guérir quelquefois, Soulager souvent, Consoler toujours”. Brit Med J. 1967; 4: 47–48
9）Donaldsom AL. Dr. Trudeau and the Adirondacks Cottage Sanatorium. A History of the Adirondacks. New York: The Century; 1921. 1（21）; 243–265
10）James WD. Dr. Trudeau, the Physician. Memorial Meeting To Dr. EL Trudeau. Johns Hopk Hosp Bull. 1921; 27: 96–107
11）茂野吉之助，細田藤彌訳．トルードー自伝「療魂記」．東京；新潮社；1943．p. 380
12）高野六郎．トルードー祭所感．療養生活 1948；293: 17–20
13）砂原茂一．医者と患者と病院．岩波新書．東京：岩波書店；1983．p. 224
14）武市匡豊．宿願の旅路：クヌッセン，ハンセン，トルードーの魂を求めて．東京：心泉社；2000. p. 147–152
15）De Groof APNA.“La médecine, c’est guérir parfois, soulager souvent, consoler toujours”: zoektocht naar de corsprong van een atorisme. Ned Tijdschr Geneeskd. 2002; 51: 2494–2498
16）Paré A: Canons et Règles Chirurgiques. Les Oeuvres. 11e ed. Lyon:chez Pierre Rigaud; 1652. p. 766–767
17）森岡恭彦．アンブロアズ・パレの格言，名言．日仏医学 2020；41（1）: 1–6
18）Masserman JH. The Practics of Dynamic Psychiatry. Philadelphia: W.B. Saunders Company; 1955. p. 359
19）Witkowski GJA et Cabanès A. Proverbes et Dictons sur les médecins. Gayez d’Esculape. Paris: A. Maloine, ed; 1909. p. 281
20）Strauss MB, editor. Familiar Medical Quotations. 2nd ed, Boston: Little, Brown & Company; 1968. p. 410
21）Doyle D, Hanks GWC & MacDonald N, editors. Oxford Textbook of Palliative Medicine. 2nd ed, 21 The interface between oncology and palliative medicine, Oxford:Oxford University Press; 1998. p. 11
22）日野原重明．プライマリ・ケアと心身医学．心身医 1980；20: 530–534
23）日野原重明．臨床医学における卒後研修の原則と実践～オスラーに始まる米国の臨床研修の展開に学ぶ～．医事新報 1983；3073: 43–50
24）日野原重明．オリバー・ウェンデル・ホルムズについて．医事新報 1983；3105: 135
25）日野原重明．いのちの尊厳を支えるケア．日本キングズ・ガーデン連合創立30周年記念講演会 2011
26）岡本高広．Editorials，特集1「甲状腺腫瘍の診療ガイドライン」．日本甲状腺学会誌 2010；1: 89
27）中島健二．チェコ・ポーランド二人歩き．京都府立医大雑誌 2014；123: 202
28）柏木哲夫．心のケアとコミュニケーション～恵み・支えの双方向性．東京：いのちのことば社；2016. p. 12